

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 10章 12-18節>

「誇る者は主を誇れ」と語るパウロが持っている考え方を学ぶその2。

1 パウロが具体的に挙げている彼らの問題点をまとめると。

10章の後半で、パウロは彼のことを悪く言っている人たちの問題点を挙げています。それを整理すると、①自己推薦をしている(12a, 18)、②仲間同士で評価し合い、比較し合っている(12b)、③限度を超えて誇っている(13-15a)、④他の人がなしたことを自分がしたかのように誇っている(15-16)、です。①の「自己推薦」の直訳は「自分で自分を紹介する」です。②は今問題になっている表現で言うと「ムラ社会」の問題です。③と④は自分を誇ることと関係して起こる問題で、④は部下のした仕事を横取りする上司を思います。全てに共通して流れていることは「自分を誇る」ということです。「自分に自信を持つ」は今の時代もいいこととされており、自分に自信を持てるのは自分を誇れるのと同じではないでしょうか。パウロは何を考えているのでしょうか？

2 パウロは福音の伝道者としてただ「誇る者は主を誇れ」に立つ。

パウロは最後の所ではっきりと、「『誇る者は主を誇れ』。自己推薦する者ではなく、主から推薦される人こそ、適格者として受け入れられるのです」(17-18)と語り、「私たちはキリストの福音を携えてだれよりも先にあなたがたのもとを訪れたのです」(14)と語っています。彼の頭も心も占めているのは主イエス・キリストのこと、その方の十字架の死によって与えられた救いのことです。そのパウロにとっては、キリストの福音を宣べ伝えていると語る彼らが、①～④のような言動をなすということに驚き、あきれたのではないのでしょうか。これら①～④は、時代を超えて偽教師(次の11章)、似非教祖、カルト集団などを見分けることにも用いられますが、平信徒の中にも蔓延り得る考え方への警鐘ともなるでしょう。「誇る者は主を誇れ」の出所であるエレミヤ書9章22-23節から、本当の信仰とは何かが学べます。見ておきましょう。

3 神様は「自分に自信を持つ」とは言われていない、必要ない!

「自分に自信を持つ＝自分を誇れるようになれ」は、聖書の神様を知らない人の考え方です。キリスト者は「誇る者は主を誇れ」を持って生きる者たちです。神様の大きな恵みの業を知らされたからであり、その時、①～④は必要なくなっていくのです。「主を誇る」≠「自分を誇る」だからです。先週の週報の3ももう一度読んでおいて下さい。